

□ オーケストラ

東条 碩 夫

1月15日、読響が下野竜也の指揮でグバイドゥーリナの「ベスト流行時の酒宴」を日本初演した。これが2020年の音楽界を予告する曲となろうとは、その時だれが想像したろう。年初頭の頃にはオーケストラの演奏会も平常に行われ、サロネとフィルハーモニア管が来日、東京都響にはフランソワ＝グザヴィエ・ロトが、札幌には首席指揮者マティアス・パーメルトが、紀尾井ホール室内管にはトレヴァー・ピノックが、東京フィルにはチョン・ミョンフンが来て指揮を執ったりしていたのだ。だが2月下旬以降、新型コロナ蔓延のため、オーケストラの演奏会も次第に中止や延期に追い込まれ、4月には緊急事態宣言が発出されたため、ついに全国的にほとんどすべての公演が中止される羽目となった。

だが5月下旬、同宣言の解除とともに、オーケストラ界も次第に活気を取り戻す。6月13日に京都フィルハーモニー室内合奏団が公開定期を再開したのを皮切りに、20日には日本センチュリー響が公開で「ハイドン・マラソン」を再開、22日には東京フィルが、26日には大阪フィルと東京響が公開定期公演を再開した。その後、各楽団が公開あるいは無観客の形で次々に定期を再開する。何か月ぶりのこれらの演奏再開は、それを待ちかねていた聴衆を喜ばせたのはもちろんだが、演奏者側からも「長いブランクを強いられたことによりステージで演奏できることが如何に素晴らしいかを感じ、作曲家や音楽に対する感謝と謙虚さの念をいっそう強く持つに至った」（日本フィル楽員他）という率直な声を生んだのであった。

数か月に及ぶ公演中止の影響は各楽団に大きな財政的負担を強いることになり、特に公益財団法人の「収支相償の原則」や「純資産300万円の確保」の枷は多くの自主運営オーケストラの苦慮する所以となったが、これを各方面からの助成金や寄付、自動努力などにより乗り切っている各楽団の努力は偉とするところである。その中で日本フィルが商工組合中央金庫を融資元に、無担保・無保証の期間10年期限一括返還型による2億円の「資本性劣後ローン」の導入に成功したことが注目された。

その他、東京都響が6月に東京文化会館との協力により音楽監督・大野和士とともに「感染症影響下における公演再開に備えた試演」として、オーケストラおよび声楽の演奏におけるエアロゾル、飛沫感染の問題に関し2日間にわたり実験と測定を行い、成果を得たことは、演奏者側からの感染対策活動の一例として評価されよう。演奏会の現場では、小編成への切り替え、一部マスクを着用しての演奏、透明ボードやカーテンの使用、各奏者間の距離を採った配置などが試みられつつ活動が続けられた。9月19日に至り客席収容率50%制限が緩和されたことにより、各楽団とも客席のソーシャル・ディスタンス方式を撤廃して客入れの回復を図ったが、その後も年末に至るまで、コロナ感染を警戒する聴衆も多く、出足が改善されているとは必ずしも言い難い。

こうした中、聴衆獲得あるいは開拓の一法として急激に浮上したのが、無観客あるいは通常の演奏会のインターネット動画配信である。3月7～8日にびわ湖ホールが無観客上演の「神々

の黄昏」を生中継でネット配信し多数の視聴者を獲得して大きな話題を集めたが、東京響も8日の同時時間帯にミュゼザ川崎から無観客の演奏をナマ配信し、これも多くの視聴者の話題を呼んだ。これに刺激されたように、3月には山形響と京都市響も無観客で生中継ライブを配信、特に山響の番組では休憩時間に温泉や旅館や名産など当地の観光を紹介して視聴者の誘致を図るコーナーを織り込むなど、面白い企画も生れた。アーカイブの演奏記録をyou tubeなど公式チャンネルで配信する方法は以前からも行われてはいたが、このような生中継配信が活発になってきたのは、コロナ禍が生んだプラス思考である。テレビやラジオが演奏会ライブを放送する機会が極度に減少してしまっただけでなく、ネット配信はそれに代わるものとしての可能性が期待できよう。ただし事前の放送予告の方法には難しい問題があるが。

なおそれとは別に、7月に東京響が音楽監督ジョナサン・ノットから送られて来た指揮映像をステージ上で再生し、それに合わせてオーケストラが演奏するという奇想天外な試みを行った。同じ曲を繰り返し演奏する時でさえ、楽員たちが柔軟な姿勢で、そのたびごとに即興的な趣向も交えて演奏していたというのは興味深い。いつの日かコンピュータで映像と音声の伝達速度の問題が解決されれば、このように指揮者とオーケストラの関係が劇的に変わることもあり得るかもしれない。

外国人指揮者の来日が春から初冬にかけて停滞したことは、各オーケストラの音づくりにある種の表現力の低下をもたらしたが、これは状況が変われば容易く改善される現象だろう。それよりも、日本人指揮者たちがいつも以上に活躍の場を得たことはむしろ幸いであった。秋山和慶、沼尻竜典、尾高忠明、高関健、小林研一郎、飯守泰次郎、井上道義、大野和士、広上淳一、下野竜也、鈴木雅明、飯森範親らベテラン指揮者たちが国内各地を駆け回って指揮、また川瀬賢太郎、沖澤のどか、鈴木優人、原田慶太楼ら若手指揮者たちも活躍した。特に鈴木優人は読響とのメシアン「峡谷から星たちへ……」（10月6日）やパッハ・コレギウム・ジャパンとのヘンデル「リナルド」（11月3日）などで見事な指揮を聴かせ、また2021年春に東京響の正指揮者に就任する原田慶太楼は邦人指揮者としては異色の鋭いデューナーミクを駆使する指揮でオーケストラの演奏を沸騰させるなど、大ブレイクの活動を展開した。なおオーケストラ界では、2021年春から「富士山静岡交響楽団」と改称する静岡響が、ミュージック・アドヴァイザーの高関健とともに初の東京公演を行ない（12月21日）気を吐いた。また8月23日には浮ヶ谷孝夫を音楽監督とする「東京21世紀管弦楽団」が旗揚げ演奏会を行なったが、今後どのような活動を展開して行くか注目される。

来日が絶えて久しかった海外オーケストラは、11月にウィーン・フィルが日頃両国政府を巻き込んだ調整の結果、来日を実現した。指揮はワレリー・ゲルギエフ、サントリーホールで2千近い客席を久しぶりにぎっしり埋めての演奏であった。また年末近く、読響に常任指揮者セバスティアン・ヴァイグレ、東京都響にロッセン・ゲルゴフ、日本フィルにダレル・アン、N響にパブロ・エラス＝カサド、東京響に音楽監督ジョナサン・ノット、広島響にウラジーミル・フェドセーエフが登場、やっと戻って来た外国人大大指揮者として、聴衆を喜ばせた。

コロナ蔓延にかき回された2020年の音楽界ではあったが、未来志向の新しいアイデアも生まれた。クラシック音楽の演奏会から所謂クラスター感染が出なかったのは、ひとえに公演関係者と聴衆との努力のたまものだ。